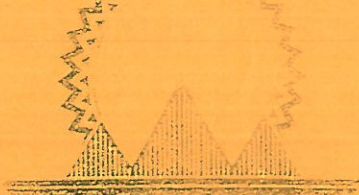


2013年11月(日) 岡野雄一著 27日(水)

- 新しく職場に来た  
三日すきぬ  
吾が言ふ声のよとあとの  
として (S.36)
- 幼子が石積む如き  
悲しみに  
泣く妻の傍に罪深く居る  
(S.30)
- いひ難き悲しき響けは  
夕暮を通りかかへ  
酒店に入る (S.29)
- 底にもる悲しき行を道行くに  
人間の如き犬の眼に遇ふ  
(S.30)  
- 幻聴・幻覚に悩まされていた父を、今とて、これは「弱心」の主宰と一言では言えないのだ。父は、仕事のアラミスと幻聴・幻覚への恐怖と、酒と身内に発散する暴力で生きながらえていた。酔った暴れ姿は今でも鮮明に脳裏に残っている。飲んでははやく快活になるわがかな問の、青年の父は、それを曇り日の一瞬の陽射しのようが好きだった。すぐに陽射しは消え、くたくたに泥酔して倒れた。父は救いを求めるように仏壇の前に座り、救いを求めるように短歌にのめり込んだ。  
\*以上、「アノコスの母に会いに行く」の中列。短歌は著者の父親の作品。主人公「アノコスの母に会いに行く」の中には、先に天国に逝った父が「アノコスの母に会いに行く」の著者の会いに来るのだった。それかまた、いい感じなのですよ。

ANO DO MOTEN



山陽堂書店  
03-3401-1309

「アノコスの母に会いに行く」  
11月19日(日) 11時~17時  
11月27日(日) 11時~17時  
\* 山陽堂書店にて「アノコスの母に会いに行く」の発売記念イベントが11月14日(木)は18時からあります。

漫画家の岡野雄一氏は「認知症」で「アノコスの母」を言葉の方向性が狂ったように描く。この「アノコスの母」に会いに行くのは、2013年「アノコスの母」の可笑しくも切ないうち2年間を描いた作品集。全国で下書きの話題を集め、ドラマや映画にもなったベストセラーです。

主人公の顔として描いたのは、漫画の中、「人生の重荷を下ろした」の主人公、とびきりの笑顔とふりまきです。この「いひ難き悲しき響けは」は、家族の死や別れに直面して、岡野氏にはこの希望も再びありました。この漫画展では、岡野氏の解説と作品と振り返ります。(アノコスの母に会いに行くの翻訳)

「アノコスの母に会いに行く」 昨年度の新聞の記事などに下書きの、この本がよく目にはしてました。アノコスの母に「又々、... 下書きの主人公は「アノコスの母」と思っていたものの「アノコスの母」という行動に初めは驚いていました。この夏、2年前の出版関係の集まりで、一緒して福岡の西日本新聞社の末崎さんから、山陽堂と繋がっていただきました。

そのとき「アノコスの母に会いに行く」の担当編集者の末崎さんとは、笑ったので、早速取り寄せ。更に読んでくれたら、口を張って「可〜く... 本を読め」と言いました。末崎さん、添いぐさというように昭和時代の戦前からの本も、子と母のころ、家族のいざこざのつらさを描いた本も、アノコスの母に会いに行く。アノコスの母は、いい感じなのですよ。

